チュウゴクナシキジラミ

○被害と発生生態

本種は、中国及び台湾に分布し、国内では平成 23 年に佐賀県、平成 24 年に山口県で発生が確認されている。台湾では PDTW（ナシを枯死に至らしめる病害 pear decline in Taiwan）の病原ファイトプラズマを媒介することが報告されているが、日本では本病害は確認されていない。

幼虫が主に葉裏の主脈付近で吸汁し、排泄物（甘露）にすす病が発生するほか、葉の黄化と早期落葉を引き起こす。早春から晩秋まで発生を繰り返し、主としてナシの樹皮下で成虫態で越冬する。本種は季節型（夏型・冬型）が知られ、成虫の全長（頭頂から前翅端まで）は 夏型が 2.2～2.8mm、冬型が 2.8～3.5mm である。また、体色は夏型が青緑色から黄色まで変異に富み、冬型は黒褐色で腹部に黄褐色の縦条がある。幼虫の体色は夏型が淡緑色から黄色で、冬型は黒褐色である。葉縁や植物体表面のくぼみに産卵し、卵形は紡錘形で産下直後は白色のちに黄色となる。

図１　葉柄基部に発生したろう状物

○防除方法

(ア)耕種的防除

・剪定枝や落葉は園外に持ち出し適切に処分する。

(イ)薬剤防除

・発生園では幼虫発生開始時の４月下旬～５月上旬と成虫幼虫の急増前の６月下旬～７月上旬に防除する。

(ウ)防除上の注意

・果そう部や葉に付着する甘露や、幼虫が尾部から排出する白色のろう状物を目安として、早期発見に努める。

・黄色に誘引されるので、黄色粘着板を設置して早期発見に努める。

図２　成虫（左：夏型、右：冬型）

図３　卵（左：葉縁、右：短果枝しわ部）

図４　５齢幼虫

図５　葉裏に寄生した幼虫とろう状物

図６　葉裏のすす症状